
君に。

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に。

【コード】

N3998I

【作者名】

空

【あらすじ】

中学1年生の車谷青波は素直で明るくクラスの人気者。ただどかなりの鈍さのせいで恋に未経験。

そんな青波はあるきっかけでクラスメイトの志貴陸也という少年に惹かれていく。

恋愛に興味がなかった陸也だが次第に素直でひたむきな青波に惹かれていくが陸也にはサッカーという夢中なものがあった。

プロローグ

大切だった

今見えてる空や雲
笑顔で話していること

なにもかも大切に
初めてで暖かくて

小さい大事なもの
1つ1つ学んでいった
また、きみに言いたくなる

・・・大好きだよ

序幕

何もかもが初めてだった。

だから、戸惑ってしまった。

傷つけてしまった。

それでも君は、僕に笑いかけてくれた。

優しくしてくれた。

「ありがとう、大好きだよ」

だから君に向けた、大切な言葉。

切なかつた言葉。

初めての告白は、返事なし

「で、いい加減返事きたん？」

11月この頃、肌寒くなり生徒達は白いブラウスの上に
カーディガンやセーター、ブレザーを着ている。

西校舎の3階の1-4、教室。

窓際の後ろから2列目の席に座っている車谷青波に
少し不満そうに疑問の言葉を発している小夏柚麻。

「ま、まだ・・・」

「遅!!忘れられてるんじゃないん・・・?」

青波が答えると柚麻は青波の机に上半身だけ寝そべり

残念そうに言う。

その言葉に青波は少し肩をすぼめる。

車谷青波。

中学1年生で身長145cmという小柄な少女。

小さな顔に大きな黒い瞳に真っ黒い少し短い髪。

茶色のカーディガンに黒いブレザーとスカートの

制服を着ていなければ小学生に見られる童顔だ。

青波は数日前、同じクラスの志貴陸也という少年に初めて手紙で告白をした。

だが2ヶ月たった今でも返事が返ってこない。

事情を知っている青波の友達の柚麻は

茶髪の長い髪を撫でながらうーんと声を出して悩みだす。

「陸也ー!!」

ふと男子の叫び声が聞こえる。

見ると男子の1人が陸也にふざけて抱きつこうと
しているのだが軽く避けられているところだった。

「酷」

泣きまねをする男子を見て他の男子も笑い出す。

陸也もさっきまでの無表情から少し笑みを浮かべる。

——あ・・・笑った・・・

青波はその光景を見ながらふと思う。

陸也の笑顔に見惚れていると目線に気づいたのか

陸也と目が合う。

だがすぐに逸らされてしまった。

——あ、見えなくなつた・・

少しがっかりながら肩をすぼめる。

志貴陸也。

日に焼けた少し茶色の髪、背は少し高く

がっちりとはしていないがスポーツマンらしい

細型の体つきだ。

顔つきは目は少しつり目だが女子にモテそうな

顔立ちなのだが無愛想な表情に目立たない性格のせいで

そこまで女子に人気はない。

そんな陸也のどこを好きになつたのかは

青波自身も分からない。

「でもな〜2人両思いだと思ったのになー」

「うーん・・・それはないと思うで」

「でも志貴女子の中で青波しか話してるん見たことないもん」

柚麻は青波の机に頬杖をたてながら言う。

その言葉を聞いて少し下を向く青波。

「違うよ・・・」

そんなはずない・・・。

きっとあれは本当に

“偶然”
·
·
·
·
|
。

6ヶ月前のたぶん、偶然

あの時から好きになってた。

でもたぶん、話せたのは偶然・・・。

- 6ヶ月前 -

「んじゃ班になって係り決めてー」

入学式も終わり少しだけ中学校に慣れた頃

委員会と係りの決め事があった。

当時青波は班に同じ出身校の子はいなく、しかも

その班には青波以外の子達は同じ出身校の子達ばかりで

少し輪には入れにくかった。

そんな時に、班の中で仕切っている子達と

同じ出身校というのに1人何も話さない少年がいた。

それが陸也だった。

「隣・座つても、いい？」

「・・・別に」

係り決めにみんなほとんど席を立っていて

陸也の隣が空いていたので自分の席から移動した。

最初は友達になろうとしていた・・・。

ざわついている中で2人だけが何も話していなかった。

青波は隣り座ったものの何を話せば言いか1人悩んでいた。

「あの一！」

「・・・え？」

勇気を出して陸也に声を掛けた青波は緊張しながら

笑顔で話を続ける。

「名前、何て言うん？」

「……志貴……」

少し聞こえにくい小さな声で答える陸也の答えを

聞き逃さないように顔を見ながら話す青波。

「志貴くんかー珍しい名前だね！」

「……」

—— ちょっと喋ってほしい……

考えていたよりも何も話さない陸也に困りながらも

次の話を懸命に考え続ける青波。

「わ、私は車谷青波って言うんだ！よろしくね」

「……」

——
やっぱり話しかけたの迷惑だったのかな

ほんとに何も反応もしてくれない！

少し戸惑いながら次の言葉をまた懸命に考えてる時

寝そべっていた陸也が初めて口を開いた。

「お前も変わった名前じゃん」

「…………え！あ、えつとく……」

急の言葉に怒っているのだと勘違いし謝ろうと

さっきまで下を向いていた青波はいそいで陸也の方を見る。

「…………ごめんなさつ……………」

言いかけた言葉が一瞬で飛んでしまった。

初めてこちらを向いて少し笑みを浮かべていた

陸也を見てしまったから……。

謝りかけた青波を見て陸也は少し不思議そうに

「何で謝んの？」

と問いかけてきた。

なんとはいいいか分からず戸惑いながら

少し笑みを浮かべて咄嗟に言う。

「え、いや・・・なんとなく？？」

「変な奴・・・」

“なんとなく”と言う言葉を作った人に感謝したい。

何とか誤魔化せた青波はそんなことを思いながら

陸也の言葉に笑って答える。

「よく言われる」

そう言うとまた陸也は少し笑って答えた。

「おもしろいな、お前」

その時の優しい笑顔だけは忘れられない。

いつもの無愛想な顔とはまったく考えられない笑顔。

その時、青波は陸也に恋をしてしまった……。

眠たい少年と硬い先生

「起きろよー」

その言葉で過去を思い出していた青波は

現実に戻された。

次の授業は始まっていて堅苦しい社会の先生が

教卓の前に立っていた。

先程の言葉は青波だけに向けられた言葉ではなく

このクラスの寝そべって寝ている皆に向けられた言葉らしい

ことは先生の目線ですぐに分かる。

ちよつとホツとして社会の教科書を机の中から出していると
また先生の声が響いた。

「おい、鈴木！隣起こしたってくれ」

その言葉に皆の視線は廊下側の一番後ろの席の

鈴木さんに一斉に向けられる。

ノートに何か書いていた鈴木さんは急に

名前を呼ばれたことに少し焦りながら隣の

寝ている男子の肩を揺さぶる。

陸也だった。

「志貴、眠たいんやったら顔洗って来い！」

「……大丈夫です」

起き上がって少し眠たそうに答える陸也。

それを見ているクラス一同は何も言わず

また前を向きなおす。

もしそこで何かを言うと次に先生に標的にされるのは

絶対にその発言した人になることは確かなことを

分かっているからだ。

いつも騒がしいこのクラスでも社会の時間だけは

絶対に静かになる。

これは先生の力・・・というか怒られたらかなり長い時間
話が続くのが嫌なだけだろう。

青波もさっきまで陸也を見ていた視線を前に戻す。

いつもそうだ。

陸也は授業中ボーとしているか寝ているかしかない。

それなのに頭はそこまで悪くない標準。

うらやましいことだ。

そんなことを思いながら青波も皆の様にノートに

黒板の文字を写し始めた。

秋祭りの計画

息苦しい社会の時間はやっと終わり

6時間目の始まる前の休み時間になった。

青波の周りには2人の女子が集まってきた。

「だる〜あと1時間もあんなんで！帰りたいわー」

青波の肩にもたれかかってくるのは

さつきも一緒に話していた

赤崎柚麻。

肩までかかるきれいに染まった茶色の髪にすらっとした

大人びた顔立ち。

ねずみ色のカーディガンの上に黒いブレザーから

ブラウスの襟を出して、少し短めの黒いスカート。

そして先生は知らないが片方の耳にはピアスの穴が開いてある。

「ほんま〜てか社会の時間寝れへんから嫌やわ」

もう1人は浅井杏。

前髪を顔の真ん中で分けて青波よりは長い黒髪に

モデル顔負けの身長と足の長さ。

黒いカーディガンの上にやはり黒いブレザーからは

ブラウスの襟を出している黒い少し短めのスカート。

どちらとも同じ部活仲間で仲のいい友達。

外見は今時だが内面は2人とも優しく面白く

部活も真面目にやっているしいい仲間だ。

(袖麻のピアスは空けるギリギリまで反対したのだが)

青波も2人の様にスカートは短いのだがブラウスの襟を

ブレザーから出すのはしていない。

(一度2人にされたのだが童顔なのであんまり似合わなかった)

別に青波は太くもなく足も短くないのでスカートが短いだけで

襟を出さなくても可愛いらしいし今時言うインキャラの様な

服装にはならないのでよしとしている。

「でもあともうちょっとで秋祭りだからいっか」

ふと柚麻が言う。

秋祭りとは青波達がすんでいる地域で行う祭りだ。

近くの商店街の方に屋台が出たり地域ごとの学校の

吹奏楽などが舞台上で演奏する恒例行事だ。

その日だけは学校も午前中だけの授業で生徒たちも

昼から存分に祭りを楽しめることができ最高だ。

「メツチャ楽しみやわ〜」

「やんな！屋台とか食いまくったるわ」

「ごちになりますー笑」

「いらんわ!!」

青波達は3人ともそれぞれ違う小学校出身で一緒に

秋祭りに行ったことはなくよけいに楽しみだった。

ふと今年は3人で秋祭りをまわれる事を楽しみに話していた

青波達に急に男子が話かけてきた。

「お前らもやっぱ秋祭り行くん？」

「行くにきまつてるやん!!」

男子の1人新庄一磨。

クラスの中心的な明るい少年。

黒い髪にかっこよく着崩した制服に整った顔立ちで

女子に結構人気がある。

一磨の質問に元気よく柚麻が答える。

それを聞いた一磨は少し黙るとすぐに何かを提案した様に口を開いた。

「じゃあオレらと一緒に周らへん？」

「え？うーん・・・どうする？」

急の一磨の言葉に柚麻は少し戸惑いながら青波と杏に聞いてくる。

「別にいいな」

「うん！いいよ」

杏と青波は顔を向き合わせ互いに確認しあって答える。

それを聞くと一磨が嬉しそうに言った。

「んじゃ決まり！！オレと直樹と後誰かでいい？」

「いいよいいよ早くあと1人決めといてな！」

「おう！今説得中の奴おるから決まったらまた言っわ」

柚麻と一磨を中心に事が決まっていた。

別に男子と一緒にいっても楽しくなりそうとしか

考えていなかった青波はもう1人のメンバーなんて

考えもしなかった。

友達

・・・時は過ぎ

秋祭りの当日

「まだかな～まだかな～」

秋祭り当日、青波は学校が終わるとすぐに家に帰り
柚麻と杏が迎えに来てくれるのを待っていた。

—— 迎えに来てくれるのは2時やんな

もうちょっとかな？？

初めての秋祭りであって期待で胸がいつぱいである青波は

制服から着替えた後1人で体育座りで2人を待っている。

はたから見たら少し変な人に見えるだろう。

ピンポーン

青波の独り言しか聞こえなかった部屋の中にチャイムの音が響いた。
すぐさま青波は玄関に駆け出して勢いよく扉を開ける。

「来たよ

」！

「準備できてる?」

「うん!できてる」

青波の準備ができているとわかると柚麻と杏はんじゃあ行こうと行
って

今来た青波の家を出て行った。

それに着いていく様に青波はすぐに靴を履いて出て行く。

「なんか今日、柚麻と杏可愛い」

出て行って歩き始めたすぐ、2人の服装を見て青波が言う。

いつもよりオシャレをしている柚麻と杏はお世辞なしで

可愛かった。

柚麻は上にカラーダウンを着て下にジーンズとブーツ

杏はチェックのコートに黒のショートパンツにブーツ

2人ともうつすら化粧をしている。

「え？いつも可愛くないんー」

「違う違う！ー！いつも可愛い可愛いー」

「ハハハくやっぱりー笑」

柚麻の冗談に2人は笑いながら男子との集合場所に向かう。

ふと青波は自分の服装を考える。

2人の様に化粧はしていないしいつものようにパーカーに

ジーンズにスニーカー少しオシャレな物といえばパーカーに

ついているボンボンである。

—— 2人みたいに大人っぽくなりたいな

うらやましいな

そう思いながらぼーと2人を見ていると

杏が青波の目線に気づいて不思議そうな顔で見てくる。

「なんかついてる？もしかして化粧変!？」

「いやいや!!似合ってる!・・・何か2人とも可愛いな」と思っ
て

「え!?!本間に??照れるわ!青波も可愛いで!大好きだ!」

そう言って柚麻と杏は青波に抱きついてくる。

2人のこういうところが好きだ。

可愛いくて何でも似合ってそれでも威張つたりもしないで

誰にでも優しいし面白い。この2人は最高の友達だ。

そんなことを思っているとふと杏が口を開いた。

「そういえば男子あと1人誰になつたん？」

——
そういえば聞いていない。

「あゝ結局誰か分からんかった」

「そっかゝまあ楽しみにしとこか！」

「そやんなゝ」

そんなことを話しているといつのまにか男子と集合場所の

近鉄の駅の前に来ていた。

青波達はキョロキョロと男子達を目線だけで探す。

「まだ来てへんのかな」

「電話してみよか」

そう言つて柚麻が携帯をポケットから出した瞬間

どこからか聞き覚えのある声が聞こえた。

「おーいー！ー！コッチ」

一斉に3人が声の方に振り向くと

駅前の噴水の前で3人の男子が座っていた。

1人はすぐに一磨だと分かった。

後もう1人は一磨が言っていた直樹だろう。

そして、後もう1人……。

「え……？」

秋祭りのチャンスは・・・

言葉が止まってしまった。

目の前の人は予想もできない人だから。

「後1人分からない」

そう聞いた時、志貴くんならいいな

なんて思っていた。

でもそれはないと思っていた。

一瞬は本当にそうかも、と思った。

陸也は男子の中で一磨とよく話している

だから・・・

だがあまり期待しすぎて当日違っていた時は

へこんでしまっただろうと思ひ、あまり考えないようにした。

だから本当に陸也が来るとは思っていなかった・・・。

「え！？志貴が後1人やつたん？？」

初めに言葉を発したのは柚麻だった。

それにすぐさま一磨は答える。

「うん。こいつサッカーあるかもしんねえから分かんねしか

言わないからギリギリまで来るか来ねえか分からなかったんだよ」

「へーそうなんだー」

——
そういえば外でサッカーしてるんだっけ・・・。

陸也は帰宅部だが外でサッカークラブに入っていてかなりの

実力者らしいと聞いたことがある。

陸也は自分の話しをされてるにも関わらず話に加わるうともせず

ボーと周りを眺めていた。

「まあ行こっか！」

その一磨の言葉で一斉に皆は商店街の方へ歩き出す。

毎年の行事で屋台が多いせいかほとんど同じ学校の生徒もいて

どこで誰にあつか分からないので、皆の視線が不安なのか

男子が前、少し離れて女子と別行動の様に歩き始めた。

「ちよつ、いきなり別行動になってんじゃん!!青波、今すぐ志貴の隣へ!」

「ええ!?!ななな、なんで?!?!」

「せっかくのチャンスじゃん!!色々話して仲良くなれるかもよ?」

いきなり前の男子に聞こえないように小声で柚麻が青波に話す。

それを聞きながら青波はふと前を見る。

3人で仲良く話しているところで、話しかけれる空気ではなかった。

「今は無理かな?..」

「・・・うーん、そっだよなーなんかいいきっかけがあったらな〜」

独り言のようにぶつぶつ言いながら周りを見渡す柚麻。

しばらく屋台を周って歩くと急に柚麻が男子に叫んだ。

「なあ！そこにゲーセンあるしプリクラ撮ろや〜」

男子にプリクラはきついだろうと思いつつしながら今まで柚麻を見ていた
視線を男子に向ける。

「一磨が直樹と陸也にどつするっつと聞いているところだった。」

「2人ともいって!~!」

「んじゃあ入るー」

思っていたよりあっさりとokした男子達は柚麻を先頭に変わってゲーセンの中に入っていった。

青波ははっきり言ってプリクラは少し苦手だ。

というより写真を撮られるの自体が苦手だと思っ。

別に友達と撮ったりするのは楽しいのだが写真写りが悪いと

自分で思い込んでしまい苦手になってしまった。

でも何にあれ陸也と一緒に写真を撮れるとは嬉しいことで

青波は少し顔がにやけそうだった。

「もー勝手に選ぶで」

青波があれこれ考えてるうちに柚麻はそう言って誰も入っていない
ブリ機の中に入ってお金を入れる。

「あ、後からお金返してな」

ちやつかりとお金のことと計算する柚麻。

青波達もブリ機の中へ入り荷物を置く。

—— 志貴くんの前で変な顔とか白目になにませんように——

そんなことを心の中で祈りながらプリクラを撮っていった。

合計6枚撮れた。

祈ったおかげなのか変な顔の写真は1つもなかった。

「陸也、全部無表情じゃん（笑）」

らくがきも終わり分けたプリクラを見ながら一磨が陸也に言う。

陸也はうるせえと肩に腕を乗せてくる一磨をよけながら言う。

—— やった〜志貴くんの写真ゲット!!

そんな風に単純に喜んでいる青波は既に陸也に話しかけることなど忘れていた。

そんな青波を見てすぐに忘れていたということを察知した柚麻はゲーセンを出て行くこととする先頭の一磨の横にさりげなく並ぶ。

それを見た杏もすぐに直樹にしゃべりかけりにいく。

いつのまにかトリプルデートのような空気になっていた。

……これはしゃべらなきゃいけない空気かな

青波も空気を読んでそう思うのだが、中々横を歩いている

陸也に話しかけられない。

——— せっかく2人が気使ってくれてるんやから頑張らんとあかんけんけど……

それは分かっているのだが、返事はきてないが告白をしたことは事実なので

告白したという事実があり少し話しにくくなってしまっていた。

きっと、違う人なら普通に話せたのだろう。

考えすぎというのは分かっている。

だがどうしても意識してしまう。

それは告白したという事実だけではなく、陸也が好きな人だということも

加算されているのだろう。

せつかくのチャンスなのに――。

そう思うのに、少し早歩きで歩く陸也を見ると

しゃべりかけてほしくないのかもマイナスなことを考えてしまい

結局その日は、一回も話すことはできなかった。

頑張れなかったことと、席替え

頑張れなかった。

せっかくのチャンスだったのに。

考えすぎた。

分からなくなった。

しゃべりかけてほしくないかも、とか・・・

本当は自分のことが嫌いなのかも、とか・・・

いつもならこんな風にマイナスに考えることはないけど

どうしてかこの時は考えてしまった。

「なんでしゃべりかけなかったんさー!!」

「そっちゃん！メツチャチャンスやったやん」

柚麻と杏の2人はそう残念そうに言っていた。

青波は2人に協力してくれたのにごめんっと一言言っ

それ以上何も言わなかった。

秋祭りが終わり、12月になるとすぐ冬休みに入り

結局、陸也からの返事はないまま3学期になり

最後の席替えをすることになった。

「やったー席替え」

「今の席から逃れられる!!」

柚麻と杏といつものメンバーで青波の席で話していた。

2人は席替えということに喜んでいたが今の窓際で

先生にもあまり目の届かない席の青波は少しその席から離れるのは

残念だった。

「じゃあ書くから自分の席が分かった人は移動して」

そう言って担任が席順を黒板に書くのをクラス全員が見る。

どンドン書かれていく名前を見てやったーとかえーとか
口々に話していく。

「あ、青波けっこごう前じゃん〜残念」

「え？あー本間や……。まあ窓際やからいつか」

杏に言われて黒板を見ると青波の席は窓際側の前から3列目だった。
その席に決まり少し残念そうな顔でため息をつきながら席を移動す
る。

—— あ、そういえば隣誰かな？

そう思って後ろを振り向く。

ふと、後ろから机を持って歩いてくる陸也がいた。

—— 志貴くんどこの席やねんやろ……

そう思いながら見ていると、丁度青波の隣で陸也の動きが止まって
青波の机の横に静かに机を置いた。

「え・・・」

驚きでポツリと声が出てしまった。

隣・・・志貴くん！！！！??????

陸也は何も言わず席の移動を終えると静かに座る。

その様子を気配で感じながら青波は視線を下にする。

今の青波には神様の存在を心から信じれるだろう。

青波は黙って心の中で今日だけ信じれる神様に感謝をする。

この席で本当に、よかった。

これが青波と陸也の一番心に残る毎日の始まりだった……

「途でのんびり屋だから

「よかったじゃん!!青波」

「うん!神様に感謝するわ」

「これで話しやすいな!」

休み時間になるとすぐに青波の所に柚麻と杏が来て

まるで小さい子にする様に青波の頭をなでる。

ちょうど陸也は男子の方へ行っていたので

柚麻達の声が聞こえはいたので安心だ。

「うーん・・でもまだ返事返ってきてないしちょっと話にくいな」

杏の言葉に少し複雑そうに青波は答える。

それを聞くと柚麻は青波の頭を撫でるのを止め口を開く。

「そやんなー。てか、早く返事返せよな」

「うんうん。うちやったら殴っちゃってるわ笑」

そう冗談を言う杏の言葉を聞いて青波は笑っていると

柚麻が青波の机に頬杖をついて話す。

「てかうちなら待てへんで新しい子好きになるわ笑」

「それに比べると青波は一途やな」

「のんびり屋な青波やから待ってくれてるだけなん志貴わかってんのかなー??」

そんなことを言いながら3人ともがふと陸也の方に視線をやる。

男子の何人かが話している中で陸也もいた。

その中にいる一磨に陸也が抱きつかれそうになりいつもの様に軽く避けていてそれを見て周りが笑っていた。

「新庄、志貴に抱きつくの好きだね」笑

「ホモやねんきつと」

柚麻の言葉にサラリと答える青波。

青波の言葉に2人は笑い出す。

それを見て青波も一緒に笑っているとふと目線の気配がした。

振り返ると男子の中で陸也がじつと青波の方を見ていたが

青波が振り返り目が合うとすぐに逸らしてしまった。

——もしかして今の聞こえてたかな？

そう思って少し不安になり陸也を見続ける。

でももう一度こちらを見ることはなく聞こえていないな

と判断した青波はまた杏達と話し始めた。

少年の主張は

中学1年生の秋、陸也は初めて告白をされた。

告白してきたのは同じクラスの車谷青波。

陸也の記憶の中には同じクラスの女子でも

名前さえ覚えていないのだが青波の名前は覚えていた。

それは春に一度だけ話したからだと思う。

青波と初めて話した時、第一印象は“変わった奴”

身長は平均より低く童顔で女子からは何をしても「可愛い」と
おちよくられている。

そんないじられ役だが皆青波の性格を知っているので

自然と青波の元にやってくる。

悪口が多い女子の中でも青波の悪口は聞いたことがない。

男子からもよく『可愛い』と陰で言われている。

それに青波と話すと話すほど青波に好意を寄せる男子は多くなる。

それは誰にでも平等に接していつも素直な青波の性格だからだろう。

そんな青波から告白をされた。

ある日机の中に4つに折りたたんである紙が入っていた。

それには長々と文章は書かれてはいなく、シンプルに

『前から好きでした、よかったら付き合ってください』

そう書かれてあった。

前から好きでしたの後の文章は後から書き直したに違いない。

鉛筆の濃さが違っていたし、何度も消した後がつつすら残っていた。

その手紙を見た時、一瞬信じられなかった。

まず青波の周りの女子は彼氏がいるとか男子の中でも聞いたことがあるが

青波自身彼氏の話や恋愛の話は聞いたことがない。

そんな青波がクラスでも全然目立たない自分に告白してきたのだ。

陸也自身自分の性格は分かっているつもりだ。

女子とはしゃべる理由もないので入学してから青波を除いて

必要以外のことは話したことがない。

男子ともよく一緒にいるが特定に一緒にいる男子などいない。

同じ小学校だった一磨や直樹がやたらと構ってくるぐらいだった。

別にそれでよかった。

中学なんてただ勉強して3年後には進学するだけ。

それまで自分が熱心になれることは今までと同じ

クラブのサッカーぐらいだろうと思っていた。

それが違っていた。

たまに何で自分みたいなのがいいのか自分のことながら

青波の趣味を疑う。

話したのも一度きりだしそれ以外関わりはない。

そう思っているのだが、気になってしまう。

告白の返事を普通ならしなければいけないと思うが

初めてのことでだからいつどうやって言えばいいのか分からない。

それにまだ返事さえ決まっていない・・・考えていない。

たまに考えることもあるのだが、どうしても分けが分からなくなってしまう。

青波のことを嫌いではない。むしろ女子の中では好きなほうだ。

だけどそれが恋愛なのかは陸也自身分からない。

だから返事なんてできない。

この前行った秋祭りももしかしたら直接返事はまだかと聞かれるか

もしれない。

そう思っていたのだが青波はそんなことを聞くこともなく、ただ黙って

横を陸也の歩くペースにあわせて早歩きで歩いていた。

ペースを落とした方が青波がもしかしたら話しかけてくれるかもしれないと

思ったが、ペースを落としたところで何も話しかけてくれなかったりしたら

少しへこみそうになってしまいそうな気がした。

それに青波の真横で歩くのはどんな顔をしてどんなことを思って

歩けばいいか、考えるだけで分からなくなった。

恥ずかしくなった。

そんな色々なことを考えていたら結局秋祭りは何も話すことはなかった。

その後は前の様に何の関わりもなく、時が過ぎた頃

1年最後の席替えがあった。

別に席替えしも何の変化もないのに・・・と思いながら
担任が席順を書く黒板を見る。

窓際の3列目の右側だった。

めんどくさそうに机を持って移動する。

ふと自分が向かうほうへ目を向けると、青波がこちらを
きょとんとした目で見ていた。

——まさか、な・・・。

と思いながら自分の席のところへ移動する。

まさかだった。

横が青波だった。

「え・・・」

小さく聞こえた青波の声。

青波も驚いていたのだろう。

青波に自分が何を思っているのか知られたくはなかったので
顔に力を入れて無表情を保ちながら静かに机を置いて座る。

それからの時間、陸也も青波もお互いを見ることはなかった。

陸也はずっと視線を下にしながら横の青波の行動を気配で

感じ取る。

———
なんか、授業が長く感じる……。

そう思っていた。

この時はもう、陸也の気持ちは変化いしていたのかもしれない。

中々借りれない消しゴム

青波は今、悩んでいた。

4時間目の国語の時間、青波のノートには

書きかけの文字があった。

その書きかけの文字の中で消したい文字があるのだが

筆箱の中に消しゴムがない。

そういえば昨日、小学生の弟に消しゴムを貸した後

返してもらった記憶がない。

その時を思い出しながら返してもらった事を忘れてたことを

深く後悔する。

普通なら気軽に隣に貸してもらえば済むことなのだが

今の隣の子にはそう簡単にはできない。

ちらつと横を見る。

陸也は黒板を見ながらノートを写しているところだった。

今消しゴムを貸してくれなんて頼んだら迷惑だろうか？

今から使おうとしていたらどうしよう。

そんなことばかり考えてしまい消しゴムを必要となってから

10分くらい時間が経ってしまっていた。

こんなことなら告白した事実を消したい……。

そう思いながらまた考え込む。

後ろや前の席にも借りれる事は借りれるのだが

国語の時間はあまりにも静か過ぎて話しかける空気ではない。

一番借りやすいのが隣だった。

そろそろ借りないと国語は黙々と黒板に文字を書いては消すばかり。

これではノートをとれない。

中学に入ると内申も入るので頭は悪いが授業態度くらいは

良しとしたいのでこれだけは避けたい。

そんなことを思って考えているとそろそろ自分が止まっている

文章のところが消される順番になった。

もう借りるしかない！！

そんな勢いに身を任せて青波は陸也の肩を軽くたたく。

あ、コッチ見た・・・。

そんなことを思っていないながら不思議そうな陸也の表情を見ると

自分が肩をたたいたことを思い出す。

———
そうだ!!! 私が呼んだんだ!!!

一瞬のことで思考が周らなかつた青波は自分が呼んだことを忘れていたので思い出した瞬間焦って声を出す。

「え、えっと……ごめん……消しゴム、借りてもいい?」

途切れ途切れに言うと陸也は青波の手に消しゴムを置いてくれた。

机じゃなくて自分の手においてくれたことが少し嬉しくなりながらいそいで返さなきゃと思い急いで消したかったところを消す。

「ありがとう」

消し終わるとすぐにそう言って陸也に渡す。

その時ふと手が触れたのに少し恥ずかしくなる。

どきどきしながら前を向きなおす。

顔が火照ってる感じがして軽く顔を隠すように

手を添えて下を向く。

早く次の文章を書かなければいけないのだが

それから文章を書くこととは思えなかった。

無表情から緩んだ表情と、距離

消しゴムをやっと借りれた日以降

陸也とは話せないまま、後何日かで

2年生になろうとしていた。

そんな時、学校内ではインフルエンザが

流行ってしまったって何組かのクラスは学級閉鎖になっていた。

1年4組も何人がが休んでいて学校に来ている何人も

授業中咳き込んでいる人が多かった。

青波もその中の1人だった。

自分ながら風邪を引いてるとはわかっていたのだが

風邪で学校を休んだことがなかったので大丈夫だろうと

思っていたのだがとうとう熱を出した。

なんとか熱が下がった後は学級閉鎖になってしまい

中々学校には行けず、一週間後久しぶりに学校へ登校すると

隣の陸也が休んでいた。

きっと風邪をうつしてしまったのだろう。

それから3日間陸也は休みっぱなしだった。

学校に来た時は久しぶりに陸也を見てほっとした。

それからまた青波が悩みだしたのは英語の時間だった。

陸也が休んでたぶん英語はかなり進んでいた。

英語は単語や文章の訳などその時その時の授業でノートを

とっておかないと分からなくなってしまつので陸也が休んでたぶん

進んでしまっていたので陸也は何も言わず少し困っていたのを青波は感じ取っていた。

ノート見せたほうがいいかな・・・。

そう思うのだが、今英語の先生が書いている黒板の文字を

陸也は懸命に書いていたのでそれを妨げていいのかと悩んでいた。

青波は早めに早めに今黒板に書いていることを移して

いつ陸也に渡そうか考えていた。

少しこの状況は消しゴムの時に似ている・・・。

そう思いながら何度も陸也の様子を窺う。

「じゃあ時間余っちゃったしワークでもしといて」

英語の先生はそう言ってクラスの中で一番英語が分かっていない生徒のところへ教えに行く。

その言葉を聞くと生徒達はワークなどをしたり隣や後ろと話したりしていた。

今なら大丈夫かなと思って陸也を見るとノートをぼーと見ていた。

青波は前のように肩を軽くたたく。

陸也は静かにこちらを不思議そうに見る。

「ノート・・・見る？」

やっとのことで言えたことばを聞くと陸也は何も言わず頷く。

それを確認して青波は陸也にノートを渡す。

それを受け取ると陸也は早速移し始めた。

よかった・・・かも

そう思いながらほっとする。

こんなこともあるかもと思っていつもより綺麗に

ノートを書いてよかったと思ったりもしていた。

「ありがとう」

数分経つといつのまにか書き終えた陸也が青波に

ノートを差し出してきた。

「さっし」

そう言って受け取ろうと陸也の方を見ると

陸也は表情を少し緩めていた。

もしかするとそれは笑顔というものに分類されるかもしれない。

それを見て少し驚いているといつの間にかいつものような

無表情に戻っていた。

だが今のたった表情の変化だけで青波にとっては少し

陸也との距離が縮んだような気がした。

結局この日と消しゴムの日以外は青波と陸也は

言葉を交わすことはなかったが確実に距離は縮まっていた。

そして、2年生となった……。

離れた2年生。

4月、新学期。

青波は学校に来るとすぐに昇降口に貼っている

クラス表を見る。

志貴くんと同じクラスでありますように・・・そう思いながら

クラス表の中で自分の名前と陸也の名前を探す。

「・・・離れちゃった・・・」

青波は2 - 4 陸也は・・・2 - 2。

さっきまでの楽しみは陸也と離れたことで

なくなつてしまいトボトボと東校舎の2階へと向かう。

2年になると3組と4組は2階、1組と2組は3階と

クラスが離れただけではなく階まで変わってしまうので

中々会う機会がない。

それを思うとどんどん青波は残念そうに教室へ入る。

「青波ー!!!!」

「え?・・・あつ!杏」

教室に入ると急に青波に杏が抱きついてきた。

「おんなじクラス何？」

「うん！よかった〜離れたら寂しいと思ってたから」

杏と話しながら自分の席まで言って鞆を置く。

杏の嬉しそうな顔を見るとついさっきまでの

悲しみが喜びに変わる。

ふと杏が残念そうな顔で言う。

「でも柚麻と別れちゃったちゃったね・・・」

杏とは同じクラスになれたが柚麻とは離れてしまった。

柚麻は3階の1組だった。

「・・・あーうん・・・でも休み時間とか会いに行こ！」

「そやんな！青波これから1年間よろしくな！」

そう言いながらまた杏は青波に抱きついてくる。

本当のことを言うとやっぱり少し寂しい。

だけど本当に杏がいてくれるだけで青波にとっては
嬉しいことだった。

「お！またおんなじクラスかよ」

明るい声が教室に響き渡る。

同じクラスらしい一磨と直樹が青波達に話し掛けてきた。

「またって何やねん」

「うわゝまたうるさくなる・・・」

杏の言葉に直樹が答える。

その言葉の後、杏に叩かれながら逃げる直樹。

中島直樹。

長身の身長に一磨と陸也と同じ女子に人気がありそうな顔立ち。

黒髪でてっぺんの髪をワックスで盛っている。

発言がおもしろくて自然に周りを楽しませてくれて

誰にでも優しいので女子にもっている。

「早く席座れー」

話していると教室に新しい担任が入ってきて叫ぶ。

それを聞いて青波達も急いで自分の席に戻る。

出席番号順で青波の席は窓際の3番目だった。

——志貴くと隣やった時の場所や

そう思いながら隣の席の子を見る。

話したことはないけど確か、直樹達と仲がいい岡部棗だ。

爽やかな少し短めの黒髪に整った顔立ち。

スタイルも良く性格もいい。

学年1のモテ男子と聞いたことがある。

だけど彼女がいるらしいく棗のことが好きだが告白はしない

という女子が多い。

——あんまりしゃべりなさそうだな・・

そう思いながら下を向く。

早く席替えしたいかも、と考えながら今の席に

少し不安を持ちながら新学期が始まった。

休み時間の楽しみ

授業中、時計を何度も見ながら青波は

胸を弾ませながらチャイムが鳴るのを待つ。

——早く、早く。

キンコーン

カーンコーン

待ち続けていたチャイムが鳴ると同時に

学級委員が号令を言う。

号令が終わった後青波はすぐに杏に声を掛ける。

「杏、3階行こー!!」

「はいはい〜」

そう言っともう教室のドアの前に立っていた青波の元

杏は走って行き一緒に教室を出る。

3階に向かい階段を上がっていき

歩きながらも階段を2段飛ばしに上がる。

———
いるかな・・・？

そう思いながら階段を上り続けた後は廊下を
少し早歩きで歩いていた足を2組の前で遅める。
目線は下を向きながら歩き続けて2組の前を
ゆっくりと通る。

ふと廊下側の窓が開いている所でちらっと
中をみる。

——
いた・・・!

ある人を教室で見つけた後、青波はすぐに早足になり
2組の横の教室の前の方へ歩いていく。

そして2組の横の1組の教室へ入る。

その同時にこぼれそうな笑みを堪えながら
もう1つの目的だった柚麻の名前を呼ぶ。

「柚麻ー！！！」

「あ！青波、杏」

2人に気づくと柚麻は走って青波達の元へ来る。

新学期が始まってから毎日この繰り返しだ。

2階の3組から青波と杏は休み時間になると3階の1組の

クラスへと柚麻に会いに来る。

青波はいつもそれが楽しみだ。

それは柚麻に会えるからというのは絶対でもう1つは

そこへ向かう途中に通る2組の中に陸也の姿を見つけたことだ。

ただ一瞬見るだけという些細な事に青波はいつも胸を弾ませる。

青波達は立ったまま話しているとご機嫌な青波に気づいた

柚麻がニヤニヤしながら言う。

「どうしたんそんなに嬉しそうに〜?」

「あ!分かった。どうせ志貴に会えたーって感じでしょ」

柚麻の言葉に杏は青波の心境を当てる。

凶星だった青波は顔を赤くして下を向く。

「可愛い奴だな〜(笑)でも返事は来てないんやろ?」

「え?やっぱまだなん!?」

柚麻の言葉に杏が驚いて青波に聞く。

青波は告白の返事のことをすっかり忘れていたので

「そうだった」と曖昧な返事を返す。

「そうだったって忘れてたんかい！どっちもどっちやな」

「てかもう一回告ったら？」

青波の言葉にすかさず杏が突っ込みを入れる。

それを見ながら柚麻は青波に提案する。

その言葉に青波は顔を赤くして首を横に振る。

「駄目駄目！・・・だってもう一回告ったし・・・」

「でも前は手紙で告ってんやろ？もしかしたらどう返事

返していいか分からんのちゃうん？」

「そうかもしれない〜じゃあ次は直接言ってみたら？」

柚麻と杏の言葉に「そうかな〜」と悩む青波。

そう考えたら納得することはできるが直接となると

上手く言える自信がない。

青波が悩み始めると柚麻たちも横で一緒に考え始めた。

結局その時間は何も結論はせず、ただ青波の中で

もう一回告白し様かという選択ができたくらいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3998i/>

君に。

2011年1月9日04時07分発行